源氏物語の女性の服色

——隆能源氏絵巻による——

山村和子

源氏物語の女性たちが着用していた下着の色はどのようであったか、身分や年齢などでちがいがあるのだろうか。隆能源氏絵巻によってその考察を試みた。

下着は、いわゆる今日のアンダーウェアも含まれるが、ここでの下着とは表着（うわぎ）に対するそれであって、大きくは単（ひとえ）、衣（きぬ）、袴にわかれる。

表は隆能源氏絵巻をもとにして作ったもので、空欄は絵巻からは判別できないものである。

この表からまずわかることは、崩黄[注1]、朽葉[注2]、蘇芳[注3]、紅[注8]などが、よく着用されていたということである。

衣（きぬ）は単（ひとえ）衣の上に着るもので、普通、五領（枚）ぐらいを「かえでもみじがさね（淡崩黄、黄、淡紅、紅）」や「山吹がさね（朽葉、淡崩黄、崩黄）」、その他種々の色を組みあわせたり、同色を重ねたりして着用したのである。

そしてこの表から次に推測されることは、身分の上下、年齢の差による下着の色の区別はなく、自由に選択されていたのであろうということである。

柏木㈠の女三の宮、竹河㈡の中の君、早蕨の中の君、宿木㈢の六の君、宿木㈢の中の君のように高貴な姫君であっても同色の衣を重ねているし、柏木㈠の背を向ける女房、柏木㈡の下左の女房、柏木㈢の左端の女房、竹河㈡の正面左の女房、橋姫の賀子の右の女房、宿木㈡の上右の女房、下右の女房のように主人のそばで仕える者であっても、色とりどりに衣を重ねて着用しているのである。

またその反対に、鈴虫の女三の宮、橋姫の大君のように、姫君が山吹重ねなどを着ているし、竹河㈠の下手の女房、竹河㈡の正面右の女房、早蕨の衣を縫う女房、上の左後向きの女房のように、同色を重ねて着ているのも見られるのである。

又、年令による色の扱いであるが、年令の判明している者からだ

け見ても、柏木㈠の女三の宮（22才ぐらい）の蘇芳の袴、橋姫の大君（24才）の淡蘇芳の単、中君（22才）の朽葉と白の衣、宿木㈡の六の君（21才ぐらい）の濃朽葉の衣、宿木㈢の中の宮（26才）の朽葉の衣、東屋㈡の浮舟（21才）の蘇芳の袴、早蕨の弁の尼（63才ぐらい）の朋黄の単、夕霧の雲居の雁（31才）の紅の袴という風に、若い姫君でも蘇芳、朽葉を着、弁の尼のように年寄りでも朋黄を着用しているのが見られるのである。

これにより下着に関しては身分、年令による色の扱いの区別はなかったと思われるのである。

巻	人物		衣（きぬ）	袴
柏木㈠	右端の女房	ひとえ すずしひとえ		
	背を向ける女房	朋黄（もえぎ）注1	淡朽葉	
	柱による女房	朋黄	朽葉がさね	
	女三の宮 22—3才	白の綾菱	朽葉三重 赤二重	白五重
柏木㈡	女房 上右	朋黄綾菱		
	上左	紅		
	下中央		朽葉（くちば）注2	
	下左		黄・紺・朽葉・朋黄二領ずつ	紅 注8

柏木㈢		横笛		鈴虫	竹河㈠		竹河㈡			宿木㈠
打出	背を見せる女房	左端の女房	女房 右	中央	左	女三の宮 24—5才 注5	下手の女房	上長押の右	左	正面 右	左	質子の女房	黒石を打つ大君 24才	中の君 22才	女房 右
紅	白地に丹の綾 注4	紅		朋黄		縹色（はなだいろ）注6	朋黄	蘇芳	白絹	朋黄綾菱	白地綾菱	赤	朋黄綾菱	白の綾菱	朋黄
朋黄	白三領	紺に紅に紺の五種		濃い朽葉重ね		比曽久色（経紅緯香）に経糸による衣二重の下に朋黄の衣二重	五重の黄		朽葉三重	五重の黄	朽葉二、白一淡紅三	縹（はなだ）	赤二・黄三 注7	白を重ねる	白三領
			蘇芳	蘇芳		紅						赤	紅		紅

橋姫	左	白地に茶による淡蘇芳	赤・朽葉・朋黄	紅
	簀子の右	朽葉	淡朋黄・黄・淡紅・紅のかさねでもみじが	紅
大君	左	朋黄	白を重ねる	紅
	挽をもつ姫24女	淡蘇芳遠菱	朽葉三・淡朋黄一・朋黄一の山吹重ね	紅
中姫	うつぶす姫22才	白	朽葉・白	
早蕨	右後向きの女房	赤	白三・朋黄二	
	右の女房と向かい合う女房	紺	白	
	衣を縫う女房	朋黄	黄五領	
	右の女房の左後向きの女房	赤	白五領	
	中の宮 25才	朋黄に繁菱模様	白五領	紅
	弁の尼 63才バカリ	朋黄	白	
宿木(一)	六の君 21—2才	白地に濃色（こきいろ）で菱襷に花菱 注9	濃朽葉三領	
	女房 上右	淡蘇芳繁菱	緋・黄・緋・赤	
	上左	淡茶地に濃色の襷に花菱	紺三領	
	下右	朋黄繁菱	濃朽葉二・赤一・緋二・黄一	紅
	下中央	白地に黒で繁菱	緋一・赤一・朋黄三	

宿木(三)	中の宮 26才	朋黄	朽葉五領	紅
東屋(一)	女房 右下	赤		
	正面を向く女房	淡朋黄に青で繁菱模様	白	紅
	几帳から半身を見せる右近	赤地無文	黄三領	
	冊子絵を見る浮舟 21才	紅地繁菱		赤
	向かい合う中の宮 26才			濃色に金泥で梅鉢模様
	髪をすく女房			赤
東屋(二)	横顔を見せる弁の尼 64才バカリ	朋黄		蘇芳
	後姿の女房	淡紅繁菱		
	臥す浮舟21才	朋黄	白二・朽葉一	蘇芳
	一段低くなった所にいる乳母	白地繁菱		
夕霧	雲居の雁 31才	白の生絹（すずし）		紅
	女房 右			紅

裘中の色について

注1　○萌黄・萌葱（もえぎ）―黄と青との間の色

注2　○朽葉（くちば）―朽ちた葉の色の意で黄色で赤みのある色。「きがらちや」ともいう。染色は薄紅に黄を加えた色（雁衣抄）とあり。織色は経紅に緯黄。

注3　○蘇芳（すはう）―二藍（ふたあい）（くすんだふじむらさき色）の赤みをおびたもの。白礬を加え紅染に似てやや暗いもの。

注4　○丹（に）―青丹（あおに）奈良香ともいう。濃き青に黄を加えた色。

注5　○縹（はなだ）―そらいろ。

注6　○比曽久色―経紅緯香に織ったもの。

注7　○赤―緋・紅色の総称

注8　○紅―鮮麗な赤色

注9　○濃キ色―ただ「濃き」という時は紅または紫をいう。